

Radioimmunoscinigraphy

(553-557)

RIS (Radioimmunoscinigraphy) と銘うったセッションは今学会が初めてであり、今後、RIS の日本語名を考えなければならないかもしれない。553 (松島ら) は ^{111}In -モノクローナル抗体 (以下 MoAb と記) が抱えている最大の問題点、肝臓への非特異的集積を解決する方法の一つとして ^{111}In と MoAb との間にスパーサーを入れることを検討したものである。一般に、 ^{111}In と MoAb との結合には -N-H-, -S-S-, -C-O- 結合などがあるが、演者らはエステル結合を用いることで -N-H- 結合と比較して血中クリアランスがきわめて早く、しかも肝臓への蓄積が希望どおり低い標識方法を開発した。腫瘍への集積も低下しないとのことで、今後、本標識法が臨床のレベルで活用されることが望まれる。CEA の腫瘍マーカーとしての適正、さらに、それに対する抗体が RIS に対しても有効であることは周知の事実になりつつある。554 (渡辺ら) の発表はその CEA のいくつかの抗体のうち、どれが RIS に有効であるかを示したものである。CEA は現在その全構造が明らかにされているが、やはり、腫瘍の特異的部位を認識する抗体の方が腫瘍への集積が高いとの結果を得ていた。556 の演題と併せて、将来 RIS に適した MoAb を選択する一つのメルクマールになると思われる。555 (勝呂ら) は抗原が化学物質 E3-3S であり、これに対する抗体を RIS に用い、抗原、抗体ともに素性がわかっている点に特徴がある。どの MoAb が RIS に適しているかを決める指標がない間はこの攻め方は正攻法と言って良い。腫瘍と血中との比を高めるために第2抗体の投与を提唱しているが、このことは臨床への応用に際して十分考慮せねばならない点となろう。556 (遠藤ら) は卵巣癌に関連した抗原 CA 125 に対する抗体について検討した。この抗体は OC 125 とは異なる部位を認識する点に特徴があり、案の状 RIS において高い腫瘍集積性が報告された。ここでも、RIS の決め手が MoAb の選択にあることが確認された。これまで卵巣癌の実験モデルが少なく、本研究により確立されたこと

を付記しておく。557 (森ら) は甲状腺癌に対する MoAb による腫瘍シンチグラフィの報告であった。甲状腺癌の RIS はその底辺では ^{131}I による治療を目的としている。腫瘍、特に、転移巣への集積性に関する検討が今後期待される。

(中村佳代子)

(558-561)

演題 558~561 はラジオイムノシンチグラフィの臨床的検討の報告であった。

558, 559 席はメラノーマに関する演題である。558 席国立高崎放の杉山らは Tc-99m 標識の Onco TracTM メラノーマイメージングキットの使用経験につき報告した。抗体は Fab の形で用いられている。まだ症例数が少なく、その臨床評価は今後の問題と思われた。

559 席国立がんセンター小山田らは In-111 標識の MoAb を用いたメラノーマイメージングについて報告した。この ZME 018 抗体を用いたイメージングは国内6施設での治験が終了したものであり、その成果の一部が示された。病巣の検出能は対照とした Ga-67-citrate とほぼ同等との報告であった。

560 席聖マ医大の高橋らは IMACIS-1 (I-131 標識の抗 CEA と抗 CA 19-9 MoAb の F(ab')₂ のカクテル) によるシンチグラフィの臨床検討の結果を報告した。病巣への集積率は全体で 56.3%、消化器癌で 77.3% であった。陽性像は病巣の血流と壊死の存在と関連があると報告された。

561 席聖マ医大の和田らは I-131 抗 CA 125 MoAb の F(ab')₂ を用いたイメージングを卵巣癌3症例で実施し、3例すべてで病巣への集積像を得たと報告した。

以上を含め、ここ数年多くの種類のラジオイムノシンチグラフィが基礎的、臨床的に検討されている。今後、他の画像診断法との比較など客観的な臨床評価が必要と思われる。

(辻野大二郎)